短 報

子宮内膜未分化癌の1例

医仁会武田総合病院臨床病理科¹⁾, 同 産婦人科²⁾

長田 憲和¹⁾ 千葉 隆史²⁾

I. はじめに

子宮内膜の未分化癌は比較的まれである。今回われわれの経験した1例は壊死が強く、術前診断に於いて、組織診よりも細胞診が有用であった。その細胞・組織所見について報告する。

II. 症 例

患 者：42歳，女性

現病歴：不正性器出血を主訴に産婦人科を受診し，子宮体部の内腔に突出する腫瘤を指摘された。内膜細胞診・組織診が施行された。

細胞診所見：背景は出血・壊死性で，比較的小型の類円形腫瘍細胞は重積性を示さず，散在性あるいは小集塊状に出現していた (Photo. 1 a)。腫瘍細胞は多形性に乏しく，核は類円形でクロマチンは細顆粒状に増量し，小型（一部中型）の核小体を有する細胞が多く認められた。細胞質は乏しく，N/C比が高く，裸核様の細胞もみられた (Photo. 1 b)。腺癌などよりも未分化癌が示唆された。

病理組織学的所見：術前の組織検査では，ほとんどが壊死に陥っており，悪性が示唆されたものの確定診断はできなかった。

摘出標本では，腫瘍は肉眼的に子宮後壁からポリー

Photo. 1 Cytologic features of tumor cells. a : The tumor cells are relatively small and show small clusters or dispersed distribution (Pap. $\times 40$), b : The tumor cells show almost round nuclei, increased chromatin, small (partially medium-sized) nucleoli, and a high N/C ratio (Pap. $\times 100$)

A case report of undifferentiated carcinoma of the endometrium

Norikazu NAGATA¹⁾, M.D., Takashi CHIBA²⁾, M.D.

¹⁾Department of Pathology, ²⁾Department of Obstetrics and Gynecology, Izinkai Takeda General Hospital

論文別刷請求先 ☎ 601-1434 京都市伏見区石田森南町 28 の

1 医仁会武田総合病院臨床病理科 長田憲和

平成 10 年 5 月 6 日受付

平成 10 年 10 月 16 日受理

プ状に内腔に突出し，表面は平滑であったが (Photo. 2 a)，剖面では出血・壊死部が多く認められ，浸潤は筋層の内側 1/2 以内であった。腫瘍細胞は比較的均一で，腺腔形成は全くなく，腫瘍内には壊死巣が多発していた (Photo. 2 b)。小～中型の腫瘍細胞が無構造・

Photo. 2 Resected Uterus. a: An intrauterine polypoid tumor mass, b: Low-power view showing massive necrosis (lower left) and homogeneous tumor cells (H-E, $\times 4$), c: The small to medium-sized tumor cells show solid proliferation, small nucleoli, and many mitoses (H-E, $\times 40$)

充実性に増殖し、核分裂像が多く (3~4/HPF) みられ、小型ないし中型の核小体を有する細胞が多かった (Photo. 2 c). 特殊染色では、鍍銀法で上皮性を示し、Grimelius 法で陰性であった。免疫染色では、 α -smooth muscle actin・chromogranin・synaptophysin は陰性、epithelial membrane antigen・cytokeratin はほぼ陰性、neuron-specific enolase (NSE)・vimentin は一部ながら陽性を示した。

以上の摘出標本の組織所見から、神経内分泌癌も疑われるが、未分化癌と診断した。

III. 考 察

鑑別診断として肉腫 (高悪性度子宮内膜間質肉腫、平滑筋肉腫) もあるが、類円形の腫瘍細胞で、

vimentin の陽性度が低く、 α -smooth muscle actin が陰性であり、好銀線維が腫瘍細胞を囲む箱入像もないことから否定されうる。

子宮内膜の未分化癌はまれで、その頻度は子宮内膜癌の 1.6% という報告がある¹⁾。細胞診所見は、子宮頸部の未分化癌と同様で、1) 散在性もしくは小集塊性に出現、2) 核は類円形で、N/C 比が高い、3) クロマチンは顆粒状で、核小体が腺癌程ではないが明らかな場合もある、などの特徴があり²⁾、本症例の所見に合致する。術前の組織診では壊死が著明で診断は困難であったが、細胞診の併用が有用であった。

子宮内膜未分化癌のなかには頸部に於けると同様に神経内分泌腫瘍に相当する癌が含まれている^{1,3)}。本症例も細胞形態上、小細胞癌とはしにくい、中型細胞から成る神経内分泌癌の可能性が考えられた¹⁾。しかし、NSE は陽性を示したものの、神経内分泌への分化にさらに特異的な chromogranin・synaptophysin は陰性で、本症例は未分化癌とするのが適切と思われる。

Abstract

A case of undifferentiated carcinoma of the endometrium in a 42-year-old woman is reported. Endometrial cytology revealed tumor cells showing small clusters or dispersed distribution. The tumor cells had almost round nuclei, fine increased chromatin, small nucleoli, and a high N/C ratio. These findings indicated undifferentiated carcinoma, although histology was not diagnostic due to massive necrosis of the tumor. Histological examination of the resected uterus confirmed the diagnosis, emphasizing the usefulness of cytology.

文 献

- 1) Abeler, V.M., Kjorstad, K.E., Nesland, J.M. Undifferentiated carcinoma of the endometrium. *Cancer* 1991; 68: 98~105.
- 2) 野田 定. 婦人科鑑別細胞診断図譜. 東京: 医歯薬出版 (株), 1995.
- 3) Huntsman, D.G., Clement, P.B., Gilks, C.B., Scully, R. E. Small-cell carcinoma of the endometrium. A clinicopathological study of sixteen cases. *Am. J. Surg. Pathol.* 1994; 18: 364~375.